

福祉系対人援助職養成の現場から

61

西川 友理

大学デビュー！の学生に、 突きつける指導

時々、中学校や高校のおかしな校則がTV やネットで話題になることがあります。髪型の指定、下着の色の指定、持ちものの指定、休み時間や放課後の過ごし方、道の歩き方、髪をくくるゴムの色……なんとつまらない、馬鹿馬鹿しいルールの多いことか。

「でも、そういうルールは高校までだものね！」

と思って大学や短期大学、専門学校に入学し、無事大学デビューを果たした学生。それぞれすてきな色のヘアカラーやカラコン（カラーコンタクトレンズ）、おしゃれなネイルを楽しみます。

そんな彼ら、彼女らに対して、実習にふさわしい髪の色やお化粧のあり方、さらには言葉遣い、靴の脱ぎ方、上座下座、

フォーマルな電話のかけ方、訪問時の礼儀…などをちまちまと指導しなければならないのが実習指導担当者なのです。

私は今まで勤務した保育士養成校や社会福祉士養成校で、何らかの形でずっと実習指導の講義を担当してきました。この講義につきものなのが、社会的マナー指導です。実習指導担当者として、何とも矛盾を抱えがちな「実習生の社会的マナー」について少し紹介したいと思います。

微妙な髪の色

実習時に用意する学生紹介書（実習先に渡す、履歴書のようなものです）に張り付ける写真を持ってくる学生。

「先生、この髪の色で大丈夫ですか？一応黒染め（カラーリングした髪の毛を地

毛の色に戻す処置)はしたんだけど、金髪にしてたところに黒入れたからどうしても微妙に戻り切らなくて…、照明の具合でちょっと茶色くなっちゃって…。」

「うーん、大丈夫かどうかは、実習先の施設や園の先生が判断するからねえ、とりあえず努力したってことはわかるし、先方が聞いてこられたら私もそう説明するけど……先方がどう判断するかはわからないよね……。」

と、私も煮え切らない返事しか出来ません。

実習用写真撮影、オリエンテーションのための実習前訪問、実習本番、実習後に必要書類を受取りに行く時など、そのたびにこのやり取りはよく見られます。

「学生も努力してるんだから、そんなことで文句を言ってくる実習先なんてこっちからお断り！」と言いたいところですが、学生数に対して実習先も限られている中、卒業までにきちんと資格を取得できるようするには、なかなかそこまでの決断は出来ません。

相手に声が聞こえない挨拶は意味がないとか、爪が短くないと子どもの肌を傷つけるとか、腕時計やアクセサリーをしていると相手に怪我をさせる可能性があるといったことは、私も学生も納得が出来るマナーですが、髪の色やカラコンといったことは、この多様性の時代に果たして何をどう理解すればいいのか、と正直考え込んでしまいます。

養成校教員の“あるある”話

随分前、まだ保育士養成に携わっていなかったころ、社会福祉士の養成教育をメインの仕事にしていました。この時もやはり、実習指導の授業で、マナー指導を実施していました。

「ちょっときいて下さいよ、うちの実習生でね、この前施設のオリエンテーションでこんなことをしてきたのがいて…」

「ああ！うちの学校ではこんな子がいましたよ…！」

学生が突拍子もない髪型で実習に行ったとか、とんでもなく失礼な行動をしたといったことを、格好の話のネタであるように話される養成校教員の方は、そう珍しくありませんでした。聞いている方も、「ええっ！」とビックリすることが多く、正直、話は大変盛り上がります。このやりとり、福祉系対人援助職を養成する学校の教員同士の間で、割とよくある場面です。

そういう話をしたくなる気持ちはわからなくもないですし、そして悪気もないのでしょうか、私はそのたびに、なんだか学生を笑いものにして盛り上がっているようで、あまりいい気持ちがしませんでした。「だからどういう教育をしようか」という改善の方法を考えるよりも、「全くウチの若い子たちたら困ったもんだよねえ」とその場のみの笑い話でおわることも少なくありませんでした。

むしろ、

「大学生に、大学の中で、教員がこんな指導をしなきゃダメなの？」

「こういうことでなく、対人援助の専門性の部分を教えたいと思うんだけど…」

「これホントは、家庭教育ですべきところでしょ？」

と、マナー指導を行うことに疑問を呈する人もいました。

とはいえ、必要なマナー教育。

でも実際に、実習が中断されたり、よい印象を持たれなかったりする学生は、専門的な学びが足りないというよりは、（心身の不調を除いては）社会的マナーがなっていない、というケースが多かったのです。

マナー教育は家庭ですべき、といっても、今実際に目の前で出来ていない学生がいる。この学生達が、実習を無事に乗り越えるために、やはり一定の社会的マナーは伝える必要がある。

それならば、と、専門職養成教育というより「学生が実習を無事にやり遂げられるようにするためのリスクマネジメント」という位置づけで社会的マナーの指導を実施していました。指導の方法を工夫し、ツールを開発し、学生に伝えた上で、実習に送り出していました。

保育士養成における マナー教育の意味

ところが10年程前、はじめて保育士養成校に勤務した時に、社会的マナーの指導については社会福祉士の指導と若干違うな、と感じました。保育分野では「環境」という概念がとても大きいのです。

もちろん社会福祉士養成でも環境の大切さは学びますが、保育士は、自身のありかたそのものが、子どもの人的環境として、大変重要になると考えます。

例えば最近では子どもがいる前で「ヤバイ」という言葉を出すのは避けてほしい、という保育園・幼稚園がとても多いです。

「何でもかんでもヤバイ、と表現していたら、豊かな言葉の体験が出来ないからね、嬉しい、怖い、素晴らしい、なんでもいいから別の言葉に置き換えてみて。」実習先の先生はそうおっしゃいます。

ある学生がうっかり「わぁ、ヤバイ！」と子どもの前で言ったところ、瞬く間に配属クラスの子も達に「ヤバイ」「ヤバイだって！」「ヤバーい！」と面白がって広まってしまった、という話を聞きました。

ようは自分の所作や振る舞いそのものが、子どもへの教育になってしまうのです。社会福祉士養成の時にも、子どもの施設に行く学生に対して、そういう意識を持った指導をしたことはありましたが、保育士の場合、それはさらに意識しなけ

ればならないものとなりました。

ところがさらにややこしいことに、保育士養成校それぞれで、微妙に指導に違いがあるのです。私自身が非常勤講師として勤務した学校も含め、また様々な保育士養成校教員から聞いた話によると、例えば以下のようなマナー教育がありました。

- 紐靴のスニーカーはダメ、脱ぎ履きがすぐにできないから。
- 紐靴のスニーカーじゃないとダメ、足にぴったりフィットしないから。
- 長い髪は後ろで一本に地味にまとめること、さっとまとめて次の行動にうつることが大事だから。
- 長い髪はお団子スタイルにまとめる、そうしないと振り返った時に抱っこしている子どもの顔に当たるから。
- ノーメイクじゃないとダメ、子どもが顔に触った手をなめるから。
- ナチュラルメイクはしないとダメ、最近はノーメイクだと眉毛がない人もいて、それは怖いから。
- サブバッグだからといって紙袋に物を入れていかない、遊びに行くんじゃないんだから。
- ブランドバッグは持って行かない 盗難の機会をみすみす作り出す必要がないから。
- 関西弁はダメ、キレイな標準語を使いましょう。
- 地元関西の文化を大切にしましょう、土地に根差した保育をしましょう。

●既存のキャラクターもののグッズを実習先に持って行かないで、それは消費文化を助長することになるから。

●こどもが大好きな〇〇レンジャーや〇〇マン、プリキュアシリーズ等について 下調べしておく方が熱心だよね、子どもと共通の話題が出来るから。

……などなど。

ご覧になっていただいたらわかると思うのですが、ある養成校では推奨されていることが、他の養成校では絶対にダメ、と反対されていることもあります。ある注意が、他の養成校では全く気にされていないポイントで会ったりもします。

つまり、一つ一つの家の考え方が違うように、養成校それぞれで微妙にポイントが違うのです。

現場の先生はどうお考えだろうか。

保育園の園長先生が多く集まる会合で、上記のようなマナーの話をしたところ、様々な反応がありました。

まずは「なにそれ、信じられない！」と怒った、ある法人の理事長先生。

「このご時世にやれ金髪だ、カラコンの色が緑だ、その何が保育の妨げになるんですか！むしろ色々な人がいる、という事を知るためには、多様であったり、个性的であったりすることは尊重すべきなんじゃないですか！」とおっしゃいます。

「西川さん、その服装や髪色のチェックではじかれた学生、全部受け入れます。バカバカしい、そんなので実習中止になるなんて！」

とありがたいお言葉。しかし、この先生のお勤め先は、この時の私の勤務校から飛行機で飛ばないといけない距離にありました。残念。

「なにそれ、信じられない！」と大笑いした園長先生もいました。

「そんな髪の色なんて、気にしたことなかった！髪の色が、保育に何か関係あるの？あ、もちろん爪とかアクセサリーは子どもを傷つけるからチェックはするけど……いやあしかし、養成校ではそんなこと指導してるのね！面白いねえ、今度来た実習生に学校でなんて指導されてるか聞いてみようっと！」

この先生の保育園は、子どもと共に作っていく、本当に素敵な保育をなさっています。見た目がどうか、そんなことを気にするような人ではありません。出来る事なら、全ての学生をここで実習させたい、と思います。

「そりゃあ実習生たるもの、きちんとルールは守ってもらわないと！」という先生もいました。

「子どもは多様でいいわよ、でも先生方のマナーはやはり統一しないと。うちの園は1年目の新任職員は絶対に髪染め禁止、ナチュラルな髪の色で働くんですよ。実習生も勿論それを守ってもらわないと」

という園長先生もいます。色々と疑問に思い、質問しましたが、おおむね「そこは最低限の礼儀として必要と考えています」と言われました。うーん礼儀とは何か……。ところで園長先生、あなたのその白髪染めはいいのですか。そうですか。うーん。

まみちゃんの視点 “守破離”

この連載の第54号に書かせていただいたフリーの保育士、“まみちゃん”こと向井真美さんにも話し、実習の時に求められる社会的マナーについて聞いてみました。彼女はちょっと考えた後に、「守破離かなあ。」と言いました。

「いずれにせよ、保育という生活の中に入り込むわけだから、それまでの人生の常識では考えられない、合わせた事のない常識の中で、“これを守るように”と言われるわけだから、まずはそれを知る、それを守る。“型破り”ということばがあるでしょ、あれは歌舞伎の言葉なんですけど、型破りになるためには、まず型を知らなきゃいけない。まずはその場で良しとされて、常識とされて、周囲の人と円滑に環境を整えることに資すると考えられてきた行動様式を守ってみる。そうしたら、その後、“本当にこれでいいのかな？”と考える時期が来ると思うんですよ。守破離の“破”ですよ。時代に沿って、常識って変わっていくものだから、それは絶対に来る。それを踏ま

えて自分なりに“何が正しいか”を考えて実践する、というプロセスを経るんじゃないかなあ。最初に指導された社会的マナーの意味をよく考えて、自分なりのやり方をやってみる。」

「…という事は、まず先生や実習先の言う方法をやってみる、と同時に自分でそのルールの意味や方法について、学生が、自分なりに考えられる機会を、養成校は意識して教育すべき、という事ですか？」と聞くと、

「うーん、わかんないけど、多分それが大事なことだと思います。」

とのこと。

なるほどなあ、と思いました。

実習生に、「社会的マナーとしてこれを守るべき」という事項を伝えつつ、「でも本当にそれでいいのかな」と自分の頭で考えられるような教育をする。一件矛盾したことを伝えなければならないのですが、今のところ、私が一番納得出来る社会的マナー教育のあり方です。

社会的マナー教育で本当に必要な事。

社会福祉士でも保育士でも、社会的マナー指導で、本当に必要なものは、「状況や相手に応じて、自分で自己管理が出来るかどうか、対応方法を考えられる知恵と想像力」です。いうなれば、社会性のあるコミュニケーション能力、です。

保育士養成に置いて、社会的マナー教育は、目の前の子どもやその園の保育環

境にとって、何が適切なのかを学生が考えて自ら行動に出られるようになることが、最終的なゴールになるように思います。それを意識しないと、単に髪の色がどうか、靴の紐がどうか、といった、学校側の指示に従えているかどうかという、貧しい教育になってしまうのではないのでしょうか。

実は学生からも、「何が良くて何がダメか、明確な基準が欲しい」と言われることが多いのです。その方が自分の頭で考えずに済むから、はっきりいって楽なのです。あらゆる社会的マナーについて、最初は出来るだけ“守”できるように提示は出しますが、思わぬところで“あれ、これはどうしたらいいのかな”と立ち止まることがあります。時代の移り変わりは激しく、数年前までは考えもしなかったルールが、必要になったり、不要になったりするのです。そんな時に、基本に立ち戻り、「この園の子どもや保育にとって、何をすることが大事なのかな」ということを考え、行動できるような教育。なかなか工夫の仕甲斐があります。

ただの口うるさいお小言のような指導にならないように、突拍子もないことをしているからと笑い話にしないように、学生と一緒に考えていきたいと思っています。